

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2014年10月21日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.32

<生徒の名前を校舎に!>

学習塾のコンサルタントとして独立して、13年半経ちますが、全国の学習塾を回って気が付いたことの一つに、合格実績として卒業生の名前は掲示しているのに、現役の在籍生の名前は、あまり貼り出されていないということがあります。精々、在籍生の各種テストの上位者は、小さく貼り出している程度です。塾によっては、それすらない校舎もあります。

そして、さらにひどいのは、宿題忘れの強制居残りの氏名だけが掲示されていたり、課題の未提出者の一覧だけが掲示されているというケースです。見せしめとして名前を公表しているようです。

校舎は、生徒にとってどういう場所なのかを理解していれば、そんな事態にはならないはず。教育という特殊な空間のせいか、つつい校舎としての場所の意味や定義が不明確になってしまつて、変なことをしてしまうようです。

さて、今回は、「学習環境をどう整えているか!」ということを中心に書きたいと思います。

生徒が一週間のうち何回も通う学習塾の校舎は、生徒にとって、「どんな場であってはならないのか」を考えると、次の3点が最低条件として挙げることができるだろうと思います。

- ①勉強がしやすい環境
- ②安全な環境
- ③楽しい環境

勉強がしやすい環境とは、「物理的な環境（机や椅子が使いやすい・明度がしっかりある・空気がきれい・清潔等々）」、「生徒同士の人間関係」、「生徒・教師の関係」と「教師の授業中の指導力」で構成されるものです。教師が、中心的な働きをして、この環境を整えなければならないのは、言うまでもありません。

次に安全な環境とは、説明するまでもなく、「校舎の物理的な環境」はいうに及ばず、「いじめの問題」、「交通事故の問題」、「通塾路での安全の問題」です。

この2点については、基本的にどこの塾でもそれなりには、気をつけていると思いますが、最後の楽しい環境については、なかなかそこまで真剣に考えている塾は、ないようです。しかし、最近、やっとそのことに関心を持って工夫している塾が増えてきました。

生徒が、週に何回も通うところなので、楽しい環境を提供しないと退学になってしまうだろうと真剣に考えている人は、少ないようです。

私は、もともと勉強が嫌いだったので、30年前から、塾は楽しく

なければ意味がないと考え、楽しい塾創りを工夫してきました。逆に、「教育なんだから、楽しくないものだ」と諦めて、楽しさをはじめから捨てている人がいます。

しかし、それでは、学習塾としての存在価値はないのです。それでは、学校と同じ価値観を持ってしまうからです。学習塾は、生徒のやる気を引き出していく場所だからこそ、学校とは根本的に違うのです。

楽しい環境とは、生徒のセルフ・エステームが高まるような環境です。プラスのストロークが満ちている環境こそ、楽しい環境なのです。

さて、このような環境を作る第一歩として、校舎に生徒の名前を掲示してみたいかがでしょうか。「自分の名前が、何か良いことで貼り出されている」ということは、それだけでセルフ・エステームが高まるものです。

たとえば、以下のような項目で貼り出してみたいかがでしょう。

- ①自習室活用キング
- ②遅刻・欠席皆勤賞
- ③得点アップ賞
- ④定期テスト満点賞・高得点賞・努力賞
- ⑤冬期講習などの目標短冊

これらに該当する生徒の氏名を校舎の一番目立つところに掲示して、生徒の名前を読み上げてみてください!

照れてしまう生徒がいるかもしれませんが、セルフ・エステームは高まるはず。そして当然、それらの掲示の貼り替えは定期的に行ってください。掲示が、壁の一部と化するようなことはあってはならないからです。

定期的に掲示が変わり、生徒たちが「次はどんなランキングが貼られるのか?」、「今度は(も)、自分の名前は掲示されるのか?」こんな期待が持てるようにしてほしいのです

楽しい環境をどう作るかを塾全体で知恵を出し合ってください。自塾の学習空間が楽しい場所になれば、生徒は自ずと増えるものです。是非、楽しさの演出を心掛けて下さい。

勉強が楽しいものと思わない生徒だっているからこそ、楽しい環境創りを心がけるのです。楽しい環境創りを推進していけば、必ず生徒や保護者とのコミュニケーションも増加します。楽しさにコミュニケーションはつきものだからです。



公立中高一貫校では、受験生を適性検査などで選考します。適性検査は、21世紀のグローバル社会で活躍できるかどうかの資質を見るものです。教科横断的な出題形式が特徴であり、その形式に慣れておく必要があります。実施主体の都道府県市によって、出題の難度も違います。県単位で出題するところもあれば、学校別の出題となっているところもあります。検査で何を求めているのかは、国語、算数、社会、理科の分野別に掘り下げていくと分かりやすいでしょう。今回から数回に渡って、どのような出題がされているのかを見ていきます。今回は国語分野からです。

東京都立小石川中等教育学校では、出題方針は「文章の内容を的確に捉えた上で、自分の考えを文章にまとめる力を見る」ことにおいでいます。受験生がどれだけ言葉を適切に用いて表現しているか、文章を読み、読み取った内容を説明したりまとめているか、そして読み取ったことを前提に、与えられたテーマについて、自分の考えを決められた字数でまとめ、適切に表現しているかどうかを見ようとしているのです。

同校が今春出題した適性検査Ⅰは、「言葉の変化」について述べられた3つの文章を読み、各設問に答えるものでした。中でも【問題4】は「あなたは『言葉の変化』について、どのように考えますか。文章2・文章3両方の意見をふまえ、根拠を明らかにして、四百一字以上四百四十字以内で書きなさい。その際に、自分とは異なる立場の考えについてもふれること」というものです。ここで「根拠を明らかにして」という設問の視点こそグローバル社会で活躍できるかどうかの資質があるかどうかを見ようとしていると思われる。

岡山県立中学校・中等教育学校の適性検査Ⅱの国語分野の【課題1】(石井光太著「僕らが世界に出る理由」より)は、世界各国を回って現地の様子取材している筆者が、若者に向けてアドバイスをしている文章からのもので、すべて記述形式の出題で、基礎的な言葉の力や自らの経験に基づき柔軟に発想したり説明したりする力を見ようとしているものです。中でも、設問4「著者が『若い人』に『海外』で『一人旅を体験してほしい』と思うのはなぜですか。八十字以内で書きましょう」では、書かれてある内容を正しく読み取り、的確にまとめる力を見ることをねらいとしています。

広島県立広島中学校の適性検査2では、森本哲郎の『「私」のいる文章』の一節を引用しながら、設問として「『幸福な旅人』とあるが、あなたは、これからの学校生活や日常生活を『幸福な旅人』として過ごすためには、どのようなことが必要だと考えますか」が出され、「180字以上 200字以内にまとめて書くこと」を求められています。ここでは、身近な生活の中での観察力が問われ、日常的な問題意識がどの程度あるのかが見られているのです。

公立中高一貫校では、ほかに作文の出題もあります。岡山県立岡山操山中学校の適性検査Ⅱの課題2は「自然体験活動」を素材とした作文の出題でした(岡山操山中学校HP 下記URL参照)。東京都立桜修館中等教育学校では「作文」として、木材の写真(桜修館HP 下記URL参照)を素材として五百字以上、六百字以内で書くことを求めています。

国語分野では記述式中心の設問や作文形式が目につきます。ですから、文章を論理的にまとめる訓練、自分の意見をきちんと表現する練習は不可欠なものと言えるでしょう。また、原稿用紙の使い方にも慣れておく必要があるでしょう。このあたりの訓練、練習は不可欠のものと思われるので、きちんとやっておきたいものです。

東京都立小石川中等教育学校 HP ↓ 適性検査問題掲載 URL ↓

<http://www.koishikawachuto-e.metro.tokyo.jp/cms/html/entry/52/6.html>

岡山県立岡山操山中学校 HP ↓ 適性検査問題掲載 URL ↓

<http://www.sozan-jhs.okayama-c.ed.jp/children/program.html>

東京都立桜修館中等教育学校 HP ↓ 適性検査問題掲載 URL ↓

<http://www.oshukanchuto-e.metro.tokyo.jp/cms/html/entry/9/6.html>